ホーランエンヤ

江戸時代（1603年～1867年）中期に始まったホーランエンヤは、毎年新年に催される祭りです。江戸時代には、年貢米（地租として徴収された米）は荷船で、現在の豊後高田市から島原城下町（現在の長崎県島原市）へ、そして大阪の大名の倉へと輸送されました。祭りは、年貢米を届ける地元の船乗りの安全や大漁を祈る行事として始まりました。

ホーランエンヤは宝来船と呼ばれる船の上で催され、桂川の右岸河口から出発し、川を下って琴平宮（金刀比羅宮）へ、その後に若宮八幡宮へと上って行きます。船は大漁旗（漁師の旗）や万国旗（全世界の国々の旗）で飾られ、乗船するのは、漕ぎ手（こぎ手）、締め込み（ふんどしのような下帯）を付けた青年、囃子方（伝統的な楽器演奏団）、踊り子（恵比寿天と大黒天の紛争をした2人の少年）、その他、地元参事などの参加者です。

船が川を上って行くとき、川岸の観覧者は水の中に酒やお金などの捧げものを投げ入れ、漕ぎ手が冷たい川に飛び込んで泳いで行ってそれらを受け取ると、熱狂的な拍手喝采が起こります。その間、船に残っている人々は、新年を祝福して祝いの紅白餅（もち）を見物人に投げます。宝来舟が御玉シビックパークの前の目的地に着くと、再び餅が投げ渡されます。にぎやかな雰囲気は、騒がしい声援や「ホーランエンヤ、ヨイヤサノサッサ」と叫ぶ人々によって祭りの間中盛り上がります。